

安齋叢書

矢羽文考
鳥柴
春日神殿饗馬函

和書門	
二五〇九一號	類
一一三函	
二架	
二八冊	

內閣文庫	
二五〇九一號	和書
二八冊	
一六架	
一五三函	

內閣文庫	
番號	和 25091
冊數	28 (2)
函號	153 279



山田
大別
大考
真明

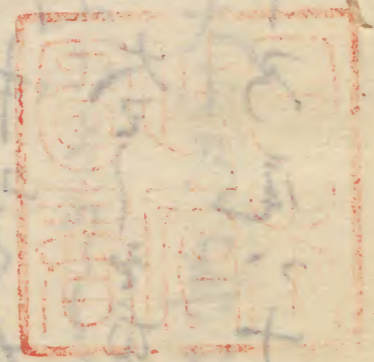
平貞大業

照

真明
一イ真阿
又
平貞大業
大考
真明



天羽文考
真羽



平貞文著



一、真羽と云ふは、此羽や真多の羽と云ふを以て
之を代りあつた系集卷七、真多、佐卯
名乎之神社の菅根乎、衣尔書付令版
兒欲得、歌を作あつた、大小乃二種あり
和名抄、小鴈就鳥の二字を以て、
神韻を引て

鷓鴣大鷓也鷓音周和名於保和之鷓古和之鷓鳥別名也

又山海經と引て鷓音就小とるへり鷓也鷓

於保和之と訓も今ノ世おあまると云是也

鷓ハ古和之と訓も今ノ世、とりと云是也大

鷓も小鷓も形状同しして大小ともこ

ろしと云故大小乃中々大鷓ハはとのし

也とりノ事あり大鷓ハを真鷓と云小鷓ハ

小鷓と云也大鷓ハ乃尾ハ十に枚あり小鷓此尾ハ

十二枚あり是亦大小乃異なり也右亦さりと

大鷓也真鷓とりあふより真鷓の羽を真鷓

と云是也音あり俗ハ山鷓の真鷓疑の真

羽何の真鷓と云必月有りあやまり也真鷓と

りハ大鷓此羽不限る事之他の羽ハ真鷓と

りノ事ハ常々なき事あり

羽文の文字

一羽の掬指と命と云也あま之文字或ハまの字

式、府の字符乃字ありを用ひ、誤也文の
字を正字と云へり文の字、あやと訓く抄紙
の事、燭抄不府ノ逆漸度随所、然多尾胡録の等
切文と云ふり文の字と用ゆへきの説也生府
符等乃字よ、抄紙の意、あやと用ゆへり
す

羽文乃名

一、必あ、羽ハ皆大ニ此羽也古書小、白羽の矢

黒法その矢切文の矢中黒の矢、凡黒の矢も
一、この矢あま、あての羽、きり、矢、た、あ、
皆大ニ此羽ノ小ニ、も、回、於、の、あ、回、
若、を、も、と、本、ハ、大、の、羽、ニ

羽字の文

一、大、も、小、も、昔、不、比、小、黒、點、駁、班、小、散
れ、く、大、小、濃、淡、疎、密、定、り、る、形、あ、り、
常、の、文、の、く、多、く、あ、り、若、も、な、き、文、也

是を草木の花ふたふくしき梅の白く桃の淡
 紅葉の黄くき法をこの紫のこし

常の文
 所定し

俗に羽麻文と云
 故に名も羽文



羽の愛文

一 大くも小くも羽の愛文あり常の文は
 異なり切文の黒白中白中黒亦白亦黒
 雪白黒法もさうさうあはの面の類はや
 物造とも右のふくしき愛文の申あつた
 ころの愛文や右のふくしき愛文の申あつた
 ころの愛文もさうさうさうさうさうさう
 草木の花ふくしきさうさうさうさうさう

黄ばりも白頭もあり桃小のあり
交りあり菊の白紫赤黄と赤黄とあり
花の色も濃淡あり草花あり実花あり
夏定事なりし多形も又作り難錦
羽衣の装文千不一万種定りな
是ホの装り文学のなる中
ふまゝの装り文あり事あり
の上は鳥二の客せし事あり

白頭のおまゝの装り又平の同僚成
瀬成七花の屋の同小雀葉の
その羅の中は白雀一
平柳營ふよりし日回金ふ
あ。成生挿ふ
のなりしを
あ。ほりきぬ
のよりなり文あり

度量の極き事之古より真羽の文
語不守一也世も多しゆき古より
是の文の今語くはき之あり今も
の文の古語も思ふも多し一又此多し
生一昔の文の二度破多し生せきも
天生自然の變化あり定りなきはこれ
古語は古語の文又えきも昔よりあり
ゆきいひたり又古語は古語の文の今も

必あり極き事ありはこれ古語あり
かき極き事あり又極き事ありはこれ
なり

切文

一切文の白く思ふは散礼混雜をば一く思ふ
切明り切に分まると残り也是亦一定の形あり
極く云り中思ふは白く思ふ白の類を
又切文の形ありきりは残り古語はけき事あり

書よりふの字残うも... 是古義也



三文... 尾... 切文や... かつ尾

りす尾... 羽の... 文の... 黒... 白... 羽... 尾... 尾... 尾...

白子尾



黒子尾
知し

雪白

一雪白、白尾を以て雪尾と云白くても黒
くても云白羽の矢と云は羽を以て是
不及

黒法羽

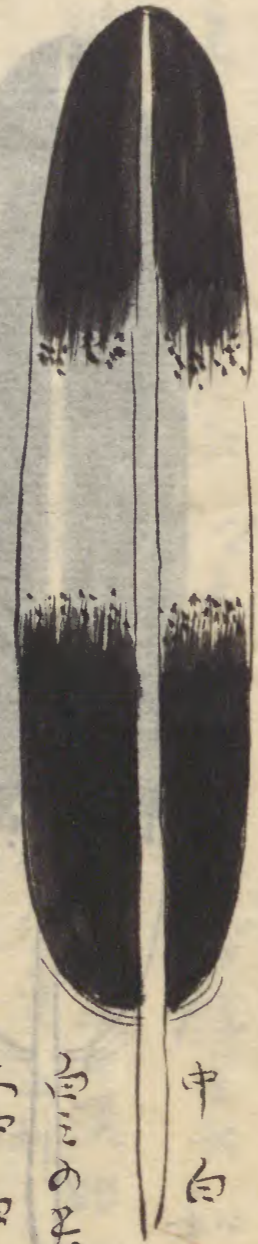
一黒法羽、白くても黒くても法
の字、助
語、く、の、意、致、も、似、く、ま、清、風、仲、法、風
因、律、神、下、法、京、根、切、と、云、法、の、字、不、同、一、結、案、
如、を、ま、に

白黒法羽

一白黒法羽、白の法の字、羽の上乃結を云
何、く、も、お、の、結、を、ま、と、云、新、の、法、結
永、の、法、結、を、以、て、後、以、案

一 中白 中黒の 中羽の 中の方 成云

中白 中黒



中白

白のまきを
大の中白と云



小中黒

大の中黒押して
知し

中黒 中白



はゆら後

黒のまきを
大の中黒と云

しま白

一 中黒 中白の 中羽の 中間也 黒の 長き 成
一 大 中黒と云 黒の 短きを 小 中黒と云

一うすべりおすりふと云護の將しるなり

うすべり



のこ白



のこ黒

俗に梅首
雑ノニ字ヲ
用亡能出
所詳ナラス
おほめき此羽の美に似る文のあるゆへおほめ
しと云ふおほめき多田舎少くはなむくちまづり
と云ふもその位名云江戸小くいむんと云和名抄云

夜顔と引く
鶴ガ 澤ガ 護田鳥ガ 於ガ 漢語抄云

綱目
目見水州

護田也と名たり又爾雅小鷲澤虞注曰今

烟澤鳥似水號蒼黑色常在澤中見人輒

鳴喚不レ去有象主守之官同名云俗呼テ

為護田鳥と名たり蒼黑色と云はるは黒き

色く鵝の尾ふおほめき羽の羽の羽の羽の羽
 悪き文あゆへおほめあし云あり又羽の上乃
 端ふもりを悪き文あひきさうりさへうと云
 言と上小言くあてんてふふあへ



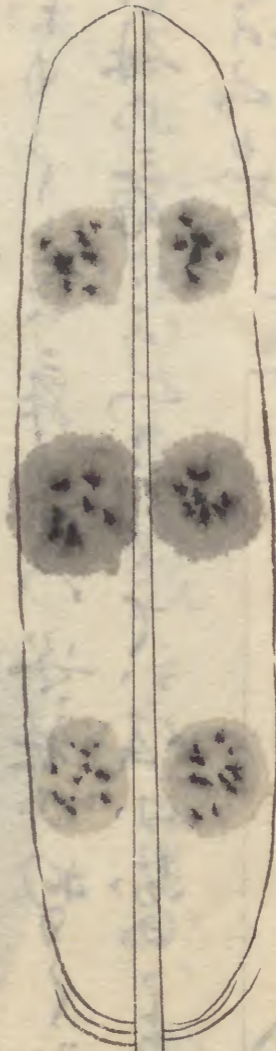
あま乃おもく

一 一のまのおの〜と云舞樂乃安麻の物〜ふ何〜
 文や安麻の物ふ〜ありて、紙ふふの〜
 書〜の〜也

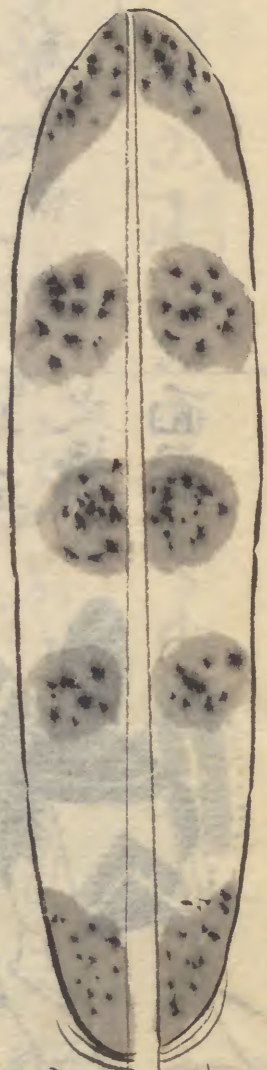
右ノ趣ハ予カ友人
 山田氏カ考ニ善
 リ當レリ



前の古茶、本末黒し後の茶、本末黒の
 本末の白黒、
 面は似たり前の茶の△上の△さうふ、
 後の茶



白茶
 是の茶は式人
 此の茶は式人
 しは茶あり



お茶の面
 古き茶は式人

上小●●如以あまは是亦△ふりきふそむかす
 お茶もふ下の●●是の茶の面の△是ふり
 三星残三角小見々々安茶の面
 名付る也右の茶の文々々式△此形あり
 式●●又●●如以の形ある残小あまの面と云
 右の真乃あまのおもての形やむらり似る
 中ふと名付るし又式圓ふあまのおま
 しく(茶)りけの人の顔をもな〜〜

書するもあり是の推量おしく其を言作し
書あり用へるは

不おの羽

一不お乃羽と云ふ羽の文の名おありは鵲の
尾のまありする家下の羽を不おの羽と云
鵲の、深山よ住む物ありて巖石の上よ
りて居る時、ま家^{イナシ}はまありて羽、並よ
不^{イナシ}解^{ウチ}ゆへ不おと云れ又、家^{イナシ}内^{ウチ}の羽と云

る成不おと得り云ひ傳へるも、不おを
必大將の征矢の羽と用ゑたりよ、故をいし
く討つと云ふ不取^{ウチ}は、説と云へい
と云ふ熱の字や此熱の字、はしと訓
むい、く討と、うはくと、討と、り、事
右の武士の風俗、不^{ウチ}説と云く、物、名、
て、た、事、成、所、く、説と、事、あり
お、蛇、堅、粟、昆、布、を、陣、の、者、お、く、う、ち

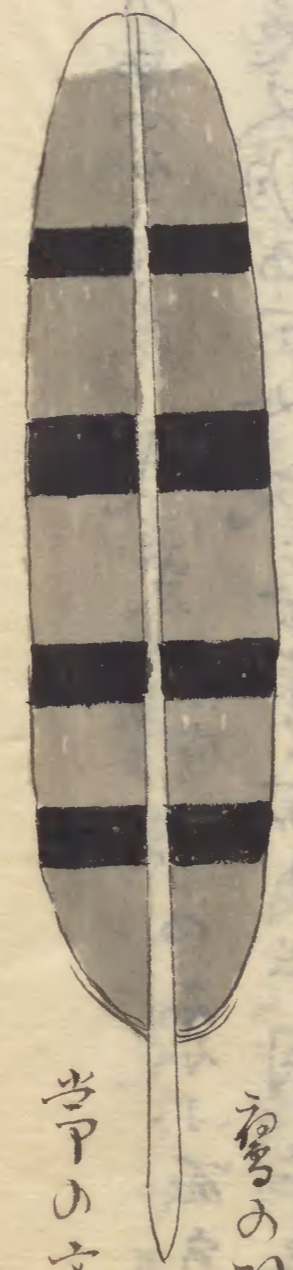
うちよ後こ婦とたぬしカド冒カク上カク意カク茹カクの美の形を
此を立カクくカクもカクいカクと云カクうカクのカク若カク也カク 是カクハカク一カクと
りふ詞ハ何れハか増の美不取ありて祝と云ふ打
の切文の詞を以て敬をいへてお切と云ふありて
曰一三言やの比の事ハ我國の事も隅ハ西土モロコシ
ふもあハ事ハ論語八佾の篇小哀公問社
於宰我宰我對曰夏后氏以松殷人以
柏周人以栗曰使民戰栗と云ふなり是栗

樹の栗を以て戰栗 朱子の注 恐懼貌 の栗小取ありし
る也又吻の曰は成カク之カク若カク也カクの熙朝樂事カク
正月朔日サシテ祭カク柏枝於柿餅以大搗カク栗之謂之
百事大吉と云ふなり是柿柿大搗と百事
大吉と云ふなり正月朔日の祝と云ふなり
和漢ともふ人嗜む曰し事なり

鷹羽

以上真羽の事也

矢の羽小鷹の羽より、くまの羽の事、
くまの羽文、くまの羽文、西土、くまの羽文、
くまの頭の角の、くまの羽文、くまの羽文、
くまの羽文、くまの羽文、くまの羽文、
くまの羽文、くまの羽文、くまの羽文、
くまの羽文、くまの羽文、くまの羽文、
くまの羽文、くまの羽文、くまの羽文、



鷹の羽

雀の文なり

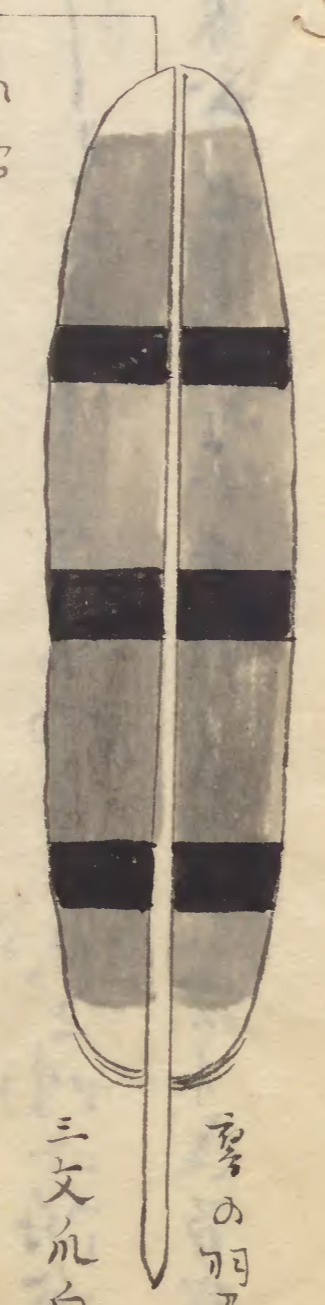
立成を引く角鷹

久萬大加今按所出未
詳但角者七角之義歟

ひさめくま

ひさめくまの、ひさめくまの、ひさめくまの、
ひさめくまの、ひさめくまの、ひさめくまの、
ひさめくまの、ひさめくまの、ひさめくまの、
ひさめくまの、ひさめくまの、ひさめくまの、
ひさめくまの、ひさめくまの、ひさめくまの、
ひさめくまの、ひさめくまの、ひさめくまの、
ひさめくまの、ひさめくまの、ひさめくまの、
ひさめくまの、ひさめくまの、ひさめくまの、
ひさめくまの、ひさめくまの、ひさめくまの、
ひさめくまの、ひさめくまの、ひさめくまの、
ひさめくまの、ひさめくまの、ひさめくまの、
ひさめくまの、ひさめくまの、ひさめくまの、

此羽のここの羽乃とてくわゆるまれの羽を
 夕々おとしやとてくわゆる平河流開書小角の
 羽とて此羽乃とてくわゆるまれの羽を
 ひたすくはとてくわゆるまれの羽を
 等の古せり記事にも同じとてくわゆるまれの羽を
 初書の羽とてくわゆるまれの羽を
 羽とてくわゆるまれの羽を



ひたすくは
 そらくは

羽の羽乃とてくわゆる
 三文丸白也

まちくはとてくわゆるまれの羽を
 のこくはとてくわゆるまれの羽を
 事或書くとてくわゆるまれの羽を
 ちとてくわゆるまれの羽を
 會ふゆとてくわゆるまれの羽を

合戦の篇はまたもみの羽と見えたりも 蜂倉の
 羽中へこれと傳を合ふと流ふと名はる
 毎一冊伝若くは伝へし事なり
 御まじりの多乃はむ山より入し取らば
 見えたりはむと傳を合ふ事なり
 知まじりたるは右の流おつた事なり
 の一とあらはれし事なり
 傳を合ふ事なり
 傳を合ふ事なり

右の流おつた事なり
 傳を合ふ事なり
 傳を合ふ事なり



右の流おつた事なり
 傳を合ふ事なり

近年の羽中へこれと傳を合ふと流ふと名はる
 毎一冊伝若くは伝へし事なり
 御まじりの多乃はむ山より入し取らば
 見えたりはむと傳を合ふ事なり
 知まじりたるは右の流おつた事なり
 の一とあらはれし事なり
 傳を合ふ事なり
 傳を合ふ事なり

安永五年丙申九月十九日

伊勢平藏貞丈録

安永八己亥年秋九月十日

源左衛門子達馬之



鷹多成鳥柴に付る事

一定家御書三百首又

書くゆくとく乃維をあく玉の

と家やうく乃枝うにきま

多葉よ付りの本好まきよきハ梅根よ付る

よの枝好ま

一二條基房卿書詞連歌云

えり可す家書書乃りかへり詠